

# 「内向き志向」の若者を「外向き志向」に育てる プロジェクト研究

Research for projects to transform the youths who do not want to  
work abroad to “Overseas-oriented”

共同研究メンバー

○金子邦博\*、清松敏雄\*、増田浩通\*、公平正一\*\*（○代表、執筆者）

## 1. 研究目的

少子高齢化や国際的な競争環境の激化なかで成長を展望できない日本に限界を感じ、多くの企業は成長が見込まれる海外市場への進出を加速化しており、そこで活躍するグローバル人材の育成、確保を進めている。

一方、その担い手となるべき若者は「内向き志向」を強めており、求める人材と働きたい若者とのミスマッチが起きている。産業能率大学が行った「新入社員のグローバル意識調査(2013年7月)」では、海外赴任を希望しない若者が直近で58.3%と、この6年間で22.1ポイントも増えているが、それとは逆に「どんな国・地域でも働きたい」という「外向き志向」の人も11.5ポイント増え、29.5%と過去最高になっており、今若者は内向きと外向きに2極化しているというのが、若者の内向き志向の真実である。

この現実を見るに、今日、大学教育で果たさなければいけないのは、内向きと外向きの間にある大きな「カベ」を乗り越えさせて若者を「外向き志向」に変えていくことである。上記の調査において海外で働きたい理由を見ると一番に上がっているのが「日本ではできない経験を積みたいから」（回答率74%）となっており、「外向き志向」に変えるきっかけは、自分を成長させてくれる『海外での経験』の有効性を理解させることがポイントであるといえる。

経験の有効性を理解させるためには、実際に海外に行って、様々な経験を得て、成長した自分を実感させることが最も重要であるが、語学の勉強を主な目的とする「留学」では、長期間の海外滞在となるため経済的な負担も大きいことや、そもそも内向き志向で語学に興味を持たない者が留学という選択肢を選ぶ可能性は低いと言える。若者の心の中にあるカベを低くして、まず観光目的でいいのでとりあえず「海外経験」をさせて、そこから「外向き志向」へ動機づけていくこれまでにない教育プログラムが必要であるといえる。

そこで本研究は、学生を「外向き志向」に変えるための『海外での経験』の有効性について、パイロットプランを作って実際に学生を海外に行かせてみて、どの様な効果があったのかを参加学生の感想を元の実証検証したものである。

\* 多摩大学経営情報学部

\*\* 多摩大学経営情報学部 教務課

## 2. 研究内容

### 2.1 学生が参加したパイロットプランの概要

#### (1) 選定した海外旅行先

バリ島（インドネシア共和国バリ州）

#### (2) 旅行の日程

9月1日 羽田11:45発（ガルーダ・インドネシア航空）デンパサール17:55着  
入国後、直ちにホテル（クタ地区 Holiday Inn Express）へ。

9月2日 銀細工の村（チュルツ）、染め物（衣類・鞆など）の村（バトゥアン）、ティルタ・エンプル寺院、テガラランで棚田、伝統芸能の中心地ウブド、ウルワツ寺院を見学後ジンバランに移動し、砂浜の上にテーブルが並べられている海辺のレストランで、夕陽を見ながら夕食。



9月3日 市街位置にあるホテルから車でビーチタウンジュン・ブノアに行き、マリン・スポーツを楽しむ。

9月4日 ホテルのあるクタ地区周辺で各自自由見学、ショッピング。夕方集合して、ホテルの近くのレストランでシーフードを食べ、その後、空港へ移動。

9月5日 デンパサール0:25発（ガルーダ・インドネシア航空）羽田8:50着

#### (3) 旅行代金

旅行代金 125,000 円、羽田空港施設使用料等 2,670 円、バリ観光ビザ（35 ドル）3,724 円、デンパサール出国税（20 万ルピア）1,831 円、海外旅行保険 4,480 円、その他現地での観光や食事などで合計約 150,000 円。

### 2.2 参加学生が現地で発見したこと

#### (1) 2012 年入学生（女性）

行ったことのない国で、英語もあまり分からないため1日目は町を歩くのが怖く、町並みをじっくり見る余裕もありませんでした。バリ島での初めての食事はチキンカレーでした。日本のカレーの辛さとは全く異なり、辛さの中に香辛料の甘さのようなものを感じ、一口食べるとそれが癖になるカレーでした。

マリンスポーツをして大きな思い出になったのがパラセーリングです。高所恐怖症な私にはハイレベルで、飛ぶ瞬間はとんでもない恐怖を感じました。しかしバリ島の海と空がとてつもなく綺麗でいつの間にか恐怖心はどこかに行っていました。ビーチに戻るころには、もう1度やりたいと思うまでになっていました。

また、バリ島でサンセットを2回見ることができました。やっぱり日本で見るサンセットとは明らかに違いとてもロマンチック



クでした。いつかは大事な人と見に行きたいなと思いました。

今回バリ島に行ったことで、ここに来なければ経験できなかったことを経験でき、また日本では分からなかったことを知ることができて一生の思い出になりました。今後もっと沢山いろいろな国に行ってみたいと思いました。

#### (2) 2012年入学生 (女性)

実際にバリ島に行ってみて感じたのは、やはり言語の違いでした。言語の壁は、本当に大きかったです。普段使っている言葉がぜんぜん伝わらないだけあってとても不便でした。思ったことを簡単に言葉にできず、周りに日本語で助けてくれる人がいないと全然だめでした。日本で生活していると、英語は話せなくても良いのではないかと思うことが多いのですが、やはり共通言語だけあって英語は話せたほうが良いというのを身にしみて感じました。英語を理解しているだけで今後役に立つと本当に思いました。



バリ島では様々な観光施設に行ったり、マリンスポーツをしたりでとても楽しい旅行でした。私は今回の海外でやはり日本は恵まれている国なのだと思えました。慣れない海外でしたが、多くのことを味わえて、充実したバリ旅行でした。また別の国にも行ってみたいと思いました。

#### (3) 2012年入学生 (男性)

海外へ行くこと自体が初だったので、着いてから現地で見るとすべてのものが目新しく感じました。まず一番に驚いたのは交通の違いです。日本とはまるで逆で、車と車の間に隙あれば入るといった状態で自分たちからすると無法地帯のように思えましたが事故をしているところを一度も見なかったのも、それには驚きました。また、水道水やシャワーの水も飲んでではダメで、コンビニで買った水で歯磨きや洗顔などをしなくてはならないので、その面で普段の生活で自分が何気なく行ってきたことがどれだけ不自由なことだったのかを思い知らされました。

4日間を通し一番感動したのが夕陽です。自分たちは浜辺からまさに夕陽が沈む瞬間を見ることができ、それを見たときに初めて「来てよかった」と思いました。海も思っていたより綺麗で、シーウォーカー、パラセーリング、バナナボートと、いい経験ができました。



この4日間の旅行を通し思ったことは、海外に行くことと日本の文化との違いに気付くことができ、視野が広がるということです。バリで過ごしたことは私にとって日本の良さを再認識することができたきっかけになり、とても貴重な経験になりました。

#### (4) 2012年入学生 (男性)

私がバリ島に行ってみて感じたことは、バリ島が日本人にとって非常に過ごしやすい環境だったということです。まず、心配していた言葉の問題だが、日本からの観光客が多いこともあって、ほぼすべての観光地に日本語を話すことのできる人がいて、特に困ることはなかった。また、バリ島では観光がメインビジネスということもあって小学校のころから英語教育が盛んで、簡

単な英語なら話せる人が多くいて、こちらも片言の英語ですが、現地の言葉が分からなくてもコミュニケーションが取れることが分かりました。

食文化についても、日本と同じ米を主食とした文化でほぼノンストレスで過ごせました。ただ、日本と違って濃い目の味付けのものが多く、油で揚げた料理が非常に多かったです。これは赤道直下の暑い気候の特徴で、食材の保存を効かせるための文化だそうです。

宗教の違いですが、インドネシア共和国全体で見ると国民の80%近くはイスラム教徒ですが、バリ島は島民の90%がバリ・ヒンドゥー教というバリ島独特な宗教を信仰しています。そのバリ・ヒンドゥー教故の守らなければならないマナーとして、左手は不浄の手としている。そのためお金や品物の受け渡し、握手などは必ず右手でするようにしなければならないことや、寺院等を観光する際には肌の露出が禁止されていてサロンという腰布とスレダンという帯を巻く必要があることを知りました。宗教によって生活が大きく影響を受けることを知ることができました。

バリ島は非常に過ごしやすい環境ではあったものの、改めて日本の素晴らしさを感じました。それは安全性という問題だけでなく、衛生面や交通、食事や商品にサービス等様々です。日本の恵まれた環境を改めて感じるとともに、世界の広さを感じる体験でした。



#### (5) 2012年入学生（男性）

バリに行って一番印象に残ったのはストリートチルドレンという、街中や観光地でお金などを乞いしている子どもたちがいたことです。実際にその場面を目にした、自分のもとに子どもたちが来ると考えさせられるものがありました。このような状況を目の当たりにし、実際に体験しなければ、日本がいかにか恵まれているのかを実感することはなかったと思います。周りの人たちが、一度は海外に行くべきだと言っていた理由はこういったところにあるのではないかと感じました。

### 3. 総括

今回のパイロットプランの学生参加者は5名で、皆、海外初体験でしたが、日本から2次元で見ていた海外に、自分の足で立って見たことで多くのことを発見していた。食事を通じて「食」の持つ可能性に気づく子や、コミュニケーションが取れることでより一層楽しくすごせることに気づく子、空や海の青さや夕焼けが人に感動を与えることに気づく子、貧困問題を考えるきっかけを得た子など、その経験値は確実に上がっている。

今回の研究で見えてきたのは、若者が「内向き志向」を強めるのは、経験したことがない環境下で自分の無能ぶりが明らかになることを避けるために「自己欺瞞」して自己防衛しているからではないかという仮説である。海外に行ったことがないのに、海外は怖いところだと自分の都合のいいように勝手に理解して、歪められた仮想の下の世界観の中で生きていこうとしているのである。自己欺瞞をやめさせて、海外での活躍の可能性という課題に挑戦する「勇気」を持たせる教育を推し進めていかなければならない。